

文化(芸術)

喜多恵美子 (大谷大学文学部国際文化学科准教授)



パクジョン へ
朴廷恵 著

『王と国家の絵画』(ドルベゲ、2011年)

박전혜 『왕과 국가의 회화』 돌베개, 2011

1866年の丙寅洋擾の際にフランスに持ち去られ、フランスの国立図書館に所蔵されてきたいわゆる「外奎章閣儀軌」がこのたびフランスからようやく「返還」された。それを記念して、これら儀軌と関連資料を集めた展覧会が韓国国立中央博物館において約二ヶ月間開催された(7月19日～9月18日)。この「外奎章閣儀軌」は長年にわたる韓国からの「返還」要請にフランス側がようやく応え、五年後の契約更新による「永久貸与」という形ではあるが、儀軌の祖国への145年ぶりの帰還が現実のものとなったのである。儀軌とは周知のとおり詳細な図解の付された王室や国家の儀式に関する記録書のことである。日本にも植民地時代に宮内庁にもたらされ、そのまま保管されている儀軌が1205冊あるとされている。こちらの儀軌についても韓国併合百周年に関する管総理の首相談話のなかで韓国側への「引渡し」が言及され、野田新総理の訪韓の際、高宗の即位式にかかわる「大礼儀軌」、正祖文集の「弘齊全書」2冊、純宗皇帝の皇太子時代の婚礼手続きを記録した「皇太子家礼図鑑儀軌」2冊の計五冊がひとまず韓国側に渡された。2011年は儀軌をめぐるひとつの大きな転換点となったといつてよい。

儀軌は王室に関わる貴重な「文化財」であるが、日本では儀軌を書物としてとらえているのにたいし、韓国では美術資料としての側面にも重点が置かれている。先の中央博物館での展示も儀軌の視覚媒体としての位置づけに光が当てられたものだった。儀式の参列者や行幸の参加者を一人もらさず描き写すという作業は膨大な量の図版として結実し、見るものを圧倒する。記録の正確さを期すために、きちんと整理された空間の中に感情を排した淡々とした筆線で小さな人物がひとりひとり描かれ、そこに施された鮮やかな彩色とあいまって儀軌は独特の魅力を放っている。

朝鮮時代には儀軌の他にも、肖像画、契会図、耆老図のような記録性をもった絵画が数多く制作され、一大ジャンルをなしている。これらの「記録画」はいつてみれば王族や国家の儀式、あるいは功臣たちまつわる絵画であり、韓国の美術史では長らく重要な研究対象のひとつとされてきた。質と量の両面からいっても、朝鮮の記録画に該当するようなジャンルは日本美術のなかには見当たらない。まさに韓国独自の絵画類型であるといえよう。記録画については、肖像画や儀軌などの分野ごとに研究書が刊行されてきたが、記録画の全体像を把握できるような概説書は不在であった。今回とりあげた『왕과 국가의 회화(王と国家の絵画)』(ドルベゲ、2011年)は、美術史研究者たちが宮廷と王まつわるありとあらゆる「絵画」を体系的に分類し、多角的な分析を加えることで王室と絵画との関係性を立体的に浮かびあがらせたもので、記録画研究における格好の入門書となっている。もちろん本書では記録画以外にも、宮中を飾った屏風をはじめとする装飾画や鑑戒画などの教化の機能をになった絵画、さらには王

族たちが直接描いた絵画についても論じられており、宮中の絵画文化全体を論じようというのが編者の本来の意図である。

本書では四人の著者が各章の執筆を担当しており、第一部(朴廷恵)で宮中絵画の全貌を概観し、第二部(尹軫暎)では「王の絵画趣味」と称して、鑑賞と制作の両方の側面で歴代の王がどのように絵と向き合ったのかについての考察が展開されている。王は民の上に君臨するという特別な立場であるがゆえに、王の書画をめぐる諸活動には教化と学術的な影響力が期待された。王の絵画趣味を通じて王宮文化の一側面に新たな光を当てようというのが筆者の意図するところである。第三部(黄晶淵)は朝鮮王室の絵画コレクションと宮中美術館についての論考である。タイトルからわかるように、ここでは近代にいたるまでの王室における絵画収蔵の歴史について述べられているが、宮中における書画収蔵を「文化政策」的な文脈で読み取ろうというものである。近世における王宮の書画収蔵処を美術館や博物館といった近代的な概念に比してしまうのは少々危うい気もするものの、近代にいたるまでの王室の収蔵活動がもつ位相を一連の流れのなかで分析しようとする作業は新鮮である。植民地時代の宮中コレクションにまで目配りがされているあたり、王室コレクションの変遷を包括的にとらえようという意欲が見えて興味深い。第四部(姜玖奇)においても、同様の視点が利いている。ここでは「帝国を夢見た転換期の韓国画壇」と題して、大韓帝国における美術政策に焦点をあて、朝鮮王朝から大韓帝国期さらには日帝強占期へと転換していく激動の時代に宮中の絵画がどのような変貌を遂げたのかについての分析が加えられている。これは朝鮮の近代史として読んでも興味深い内容である。

ざっと見ただけでも多角的なアプローチが読者を惹きつけるが、なんといっても圧巻は本書の半分を占める分量で書かれた第一部であろう。筆者の朴廷恵は韓国における宮廷記録画研究の第一人者であり、その深遠な知識と豊富な情報量に裏打ちされた図像の体系化と詳細な解説は、本書をして宮中絵画事典としての使用にも十分耐えるものとしている。なによりカラー図版が大量に提示されていることがたいへんありがたい。この点に筆者の影ながらの苦勞がしのばれて頭が下がる。宮中文化に関心のある一般読者から美術研究者にいたるまでの幅広い層に門戸が開かれた一冊である。



キム イスン
金伊順 著

『大韓帝国皇帝陵』(笑臥堂、2010年)

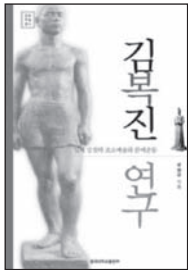
김이순 『대한제국 황제릉』, 소와당, 2010

単にタイトルだけをみると、これが美術史に関わる研究書だとは思えないかもしれないが、著者の金伊順はもともと近現代美術の専門家であり、韓国における溶接彫刻研究で学位を取得した人物である。著者と皇帝陵とを結ぶのは、「彫刻」と「近代」というふたつのキーワードだ。筆者は朝鮮でたった二つしかない「皇帝」陵、高宗の洪陵と純宗の裕陵について調査の機会を得、そこに配置された石人や石獸をはじめ、陵をとりかこむ欄干にいたるまでのあらゆる石造物をひとつひとつ検分していく。皇帝陵は既存の王陵とは異なる構造をもっているのだが、皇帝陵の調査と分析を通じて筆者は、朝鮮が清との冊封関係から脱し近代国家として面貌を整えていく過程で、国家と皇帝の威厳を効果的に知らせる媒体としての「陵」に高宗が目し、皇帝陵造営に心血を注いだことを明らかにしていく。また皇帝の埋葬への日本の関与についても追跡し、そこにどのような植民地イデオロギーが発動したのかについても分析を加えている。王の葬礼にたいする朝鮮と日本との認識の違いは朝鮮側から多大な反発を引き起こすことになった。それをうけて純宗の埋葬に際には細心の注意が払われたのであるが、それでも日本側が葬礼と埋葬にかかわったことはのちに思わぬ不協和音を響かせる結果となってしまふ。純宗が埋葬されている裕陵の石造物は日本人相羽彦次郎が制作している。技術的に優れた人物であることには違いはないとしても、日本側は皇帝陵や王陵に配置されている石造物やそこに刻まれている図像の象徴的意味をまったく理解せずに陵の造営を行ってしまった。葬送と追悼という人の一生においてもっとも厳粛な儀礼の場面において、象徴性が無視されるということは葬られる人の尊厳を傷つけるに等しいということを筆者は指摘する。この「象徴性の無視」を意図的な戦略とみるか、植民地宗主国としての傲慢さと無意識のうちになされたことととるのかによって議論は分かれるだろう。著者はどちらかというところ前者の立場で分析をおこなっているようであるが、その点にたいしては若干の疑問を呈しておきたい。

本書で見られるような、ある種文化史的ともいえる方法論は、韓国における美術史研究の特徴のひとつであるといえる。著者の金伊順は遺物の精確な計測や細やかな図像分析をもとに議論を展開しているという点で、美術史研究者としての面目躍如たるところがあるとはいえ、著者の関心は遺物それ自体から大きく広がって、大韓帝国期という時代と高宗の近代国家プラン、そして日本の植民地戦略に向けられている。純然たる作品論よりも当該社会との関係性のなかで遺物のもつ意味世界を読み解いたり、あるいは逆に作品や遺物を通じてその当時の社会状況を分析しようとするアプローチはとりわけ近代美術研究において多く採択されてきた。韓国でこのような方法論が好まれるのは、作品論を展開しようにもそもそも残存作品が少なすぎるという事情と無関係ではないだろうが、作品や遺物があくまでも人の社会的営為の産物であるという点を重視する韓国独自の発想がそこにあるように思われる。そこから翻って、研究対象をいわゆる「美術作品」の枠を超えた「視覚媒体」全体へと広げようとする点も、韓国の

近代美術研究の特徴であるといえる。日本の美術史研究からみると、こうした研究対象の外延の流動性に違和感があるかもしれないが、これはむしろ「美術」とはなにかというひとつの問題提起として受け取ることができよう。

本書は、皇帝陵の調査が直接のきっかけとなっているとはいえ、美術史学界における大韓帝国期への関心の高まりに呼応したものである。本文でも参考文献としてあげられている権幸佳「高宗皇帝の肖像—近代視覚媒体の流入と御真の変容過程」(弘益大学校博士学位論文、2005年)や陸秀炫「大韓帝国期の国家イメージづくり」(『近代美術研究』、2004年)などはその代表的な研究成果である。大韓帝国期を対象とした研究は近代国家における美術政策の意味や表象分析をめぐる展開されることが多いが、このような大韓帝国への関心のありかたは、おそらくは李泰鎮の『高宗時代の再照明』(太学社、2000年)などをはじめとする近代史研究において、暗愚の王として長らく等閑視されてきた高宗の政治家としての側面に光があてられるようになったことと無関係ではないだろう。



ユンボンモ
尹凡牟 著

『金復鎮研究』(東国大学校出版部、2010年)

윤범모 『김복진연구』 동국대학교출판부, 2010

韓国における近代美術研究は1990年代以降活発化してきたが、ここ数年の傾向としては概論から各論への移行、なかでも作家研究に力が注がれるようになってきた点が注目される。近代美術史研究の牽引者の一人である金英那の回甲を記念して発刊された論文集『時代の眼』(学古齋、2011年)にも、陸秀炫や金伊順、奇恵卿ら韓国近代美術を専攻した研究者による作家論がよせられており、現時点での研究動向を知ることができる。作家論全盛とはいうものの、混乱期や戦争などの理由により残存作品がきわめて少ない環境のなかで研究を進めるということは想像以上の困難を伴う。日本帝国主義の残滓清算の影響や、東西冷戦の緊張関係のなかでやむなく散逸し埋もれてしまった一次資料をいかに掘り起こしていくのかが、今現在も課題でありつづけているわけだ。

そうした中で発行された尹凡牟の『金復鎮研究』(東国大学校出版部、2010年)は500ページを超える大著であるということだけを見ても、すでに驚くべき成果であることがわかる。金復鎮は近代朝鮮を代表する彫刻家であるが、文学に関心のある人ならば八峰金基鎮の兄であるというほうがわかりやすいだろうか。あるいは金復鎮本人も文章を能くしたことから実際に彼の書いたものを読んだという人も少なくないかもしれない。39年という短い生涯であったにもかかわらず、彼の活動はきわめて多岐にわたっている。金復鎮は1920年に東京美術学校の選科生として高村光雲や建畠大夢に師事し、その後アカデミックな作品によって朝鮮美術展覧会や帝国美術院展覧会などの官展で入選を果たすが、東京の留学生仲間とともに結成した演劇集団「土月会」や文学同人「パスキュラ」ではむしろモダニストとしての相

貌を見せ、演劇、評論、デザインなどでその才能を発揮した。留学当時、日本で盛り上がっていた左翼運動に影響をうけて、パスキュラを発展解消させるなかで朴英熙や金基鎮らと朝鮮プロレタリア芸術家同盟 (KAPF) をたちあげ、その活動に従事することになるが、結果治安維持法違反に問われて五年にわたる獄中生活を余儀なくされた。出獄後、金復鎮はわずか数年でこの世を去ることになるが、その短い期間にも旺盛な彫刻制作や執筆活動を行っている。なかでも眼をひくのが金山寺弥勒殿本尊や俗離山法住寺弥勒大仏をはじめとする仏像彫刻を手がけていることだ。彼のモダニストぶりや社会主義的な活動を考えると、仏像の建立はあまりにも距離のある話に思えるが、こうした小さな「矛盾」の混在こそが当時の朝鮮知識人たちに特有の現象のように思える。宗教を否定する社会主義への傾倒と仏教への関心、植民地支配への抵抗と日本への留学、西洋美術と東洋美術・・・金復鎮が見せた「矛盾」は朝鮮の近代を苦しみ悩みながらも駆け抜けていった彼なりの「真実」であったといえよう。このようにさまざまな顔をもつ金復鎮をそれぞれの角度から掘り下げようとした意欲作がこの『金復鎮研究』である。著者の尹凡牟は韓国近現代美術史学会の会長をつとめ文化財庁の委員に席を連ねる人物であるが、その研究姿勢には人間味があふれ、金復鎮についての調査についても遺族との信頼関係を深めていくなかで深度を加えていったといつてよい。結果、この本自体が金復鎮へのオマージュとしての性格を持つにいたり、その点については賛否わかれるところであろう。また、初出との関連から内容的に重複している部分があったり、各章で若干時代が前後していることや、細部の記述にどうしても曖昧なところが残ってしまう点などが気にはなったが、ひとまず現時点の韓国で左翼運動にかかわった作家研究としてこれだけの資料を提出したという点で高く評価すべきであろう。

著者は多角的なアプローチをとりながらも金復鎮の左翼運動家としての側面に注目をしているので、そこをひとつの軸として読み進めればよい。ただ、そこからさらに進んで金復鎮を日帝の圧政に立ち向かった闘士であると単純にとらえてしまうと金復鎮の「真実」を見失ってしまう。『金復鎮研究』の記述は一部そうした危険性をはらんでいるように思えた。本書に限らず、近代期を生きた知識人と日本との関係性についてはもう少し重層的な分析が可能であると思うのだが、韓国での政治的な背景を考えあわせるとそう簡単なことではないことも理解できる。当時の知識人たちが日本に対して抱いていたアンビバレントな思いをそのまま記述しようとする、植民地支配を肯定しているとの誤解を受けることも少なくない。近代期知識人の評価は抗日の闘士と親日派との間で極端に振幅するしかないというのが現在の韓国での実情であろう。

本書で個人的に興味深かったのは、社会主義運動そのものだけでなく、金復鎮の拘束後の獄中生活にも光をあてようとしている点であった。とくに巻末付録に当時の尋問調書（韓訳）が掲載されていて、その応答の中から当時の社会主義運動の実態を当事者たちの声を通じて知ることができ、大いに参考になった。本書をきっかけとしてさらなる研究の進展が期待される。